

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学
所 属 メディア情報学部 社会メディア学科
名 前 山崎瑞紀
作成日 2022年10月2日

1. 責務

メディア情報学部社会メディア学科に所属し、メディアを使用する人々の社会・認知的側面の探究に関わる教育・研究活動を行っている。「社会心理学概論」(2年)「異文化間コミュニケーション」(2年)「統計学基礎(1年必修)」「社会メディア実験・測定演習(2年)」「社会調査実習(3年)」「SD PBL(1)(1年)」及び「事例研究(3年)」、「卒業研究(4年)」「文化とコミュニケーション(大学院)」を担当している。また、2年B組クラス担任、社会調査士資格連絡責任者、都市大付属等々力高校との高大連携メンター制度大学側主担当、横浜キャンパス広報(ウェブニュースチェック担当)、海外インターンシップ専門委員会委員、都筑区ふるさとづくり委員会国際交流分科会委員、留学生カフェ責任者、新聞会顧問を担当している。

2. 理念

私の教育理念は、次の2点である。

1. 大学での学びを通して、その後の人生において、世界をどのような切り口で見るかといった新たな視点を与える(方針A, C, D)

新たな視点を得ることで、それまで見ていた世界がまったく異なって見えることがある。大学での学びは、その後の人生において世界をどのような切り口で見るかといった新たな視点を与えるものであると考えている。1つの専門領域での学びを卒業研究まで一通り経験することで、専門領域の理論と手法、考え方を習得することができる。今まで知らなかったことを知るときの喜び、知っていたことを異なる視点から見ることによって知識が再構築されていくときの知的な楽しさを学生と共有したい。

2. 生涯に渡り、自ら主体的に学んでいく力を身につけることを目指す(方針A~D)

人の言っていることを鵜呑みにするのではなく、データや先行研究の成果をもとに、論理的に考える方法や習慣を身につけることは一生涯の宝になると考える。また、人生の様々な局面に対応できるよう、「諦めない」学びの姿勢を身につけてほしいと願っている。

3. 方法

上記の理念を実現するために、以下のA~Dの方針で教育を行っている。全体として、専門領域の理論と手法、考え方を講義や実習で伝えるとともに、事例研究や卒業研究を通して、調査や実験の一連のプロセスを経験しながら学べるように計画している。

方針A 学生の動機づけを高め、知的好奇心の活性化をはかる

- ・講義では、1時間講義、30分エクササイズを行い、心理尺度、教育用ゲーム、簡単な心理学実験、グループごとのディスカッションなど体験型の授業を行うよう心掛けている。
- ・講義では、毎回、穴埋め式資料を配布し、授業の最後にコメントシートを提出させるなど、学生が少しでも能動的に関わり、考える時間を取っている。書かれたコメントに対しては、次回の講義の冒頭でできるだけフィードバックするようにしている。
- ・講義以外でも(小)レポートとして、新たな視点が得られると思われる資料を複数提示し、それらを

もとに自分でも調べた上で、自分の考えをまとめる機会を提供している。

- ・「社会メディア実験・測定演習」で使用するための実験用教材を開発し、使用している。
- ・視聴覚教材（DVD等）を適宜使用し、学生の感情面に訴えることで、「知りたい」という気持ちを起こすように工夫している。
- ・発展的学習ができるように、関連文献を紹介している。
- ・事例研究、卒業研究での輪読や発表の際には、1コマ中に1人1回は必ず挙手して質問や意見を言うことで、能動的な態度を促すとともに人前で意見を言うというスキルの習得をはかっている。

方針B データの読み取りや論理的思考ができるようになる

- ・授業では根拠となるデータをグラフ等で示したり、論理的な説明を教員自らが行ったりすることで、説明方法の一つの例（見本）を示すように心掛けている。
- ・研究計画やデータ分析、発表用のプレゼンテーション作成等において、論理的展開や論理的思考に重点を置いた指導を行っている。

方針C 他者とのコミュニケーションを通して他者の視点を知ることで、多様な視点を学べるようにする

- ・多様な視点が学べるようにデザインされた教育用ゲームやディスカッションを採用している。また、実施後の振り返りで他者の視点を紹介している。
- ・「異文化間コミュニケーション」の講義では毎年、複数の留学生に母国（地域）・母文化の紹介をもらい、異なる文化からの視点を知る機会を提供するとともに、同じ国（地域）の出身でも個人による違いがあることも理解できるように心掛けている。

方針D 主体的な学びを期待しつつ、初めは枠組みをつくり、模倣の中で学ばせる

初学者にとって、理論は知っていても、初めから自分たちだけでゼロから実験や調査を組み立て、実施するのは難しい。教員と一緒にプロジェクトのように研究活動を行うなかで、このような考え方でこのように仮説を立てるのか、このような手順で評価項目を設定し、分析していくのか、といった、多少模倣のような学びの方法があると考え。事例研究では教員がある程度の枠組みを設定した上で、部分的に手続きや項目等を学生たちが考え、教員と話し合った上で最終的に決定するという方法を取っている。卒業研究では、取り組みたいテーマや方法の考案をはじめとして、事例研究よりも高い主体性を期待している。

4. 成果

- ・授業評価では、どの授業についても「総合的にみてこの授業で力は付きましたか」等の項目で平均4以上の評価が得られている。自由記述欄では、「社会心理学について様々な実験を交えながら学ぶことができとても興味が湧く授業だった」「他の授業で学んだことと結びついて分かりやすかった」「全体として、授業内容が面白かった。身の回りの疑問や今まで感じていた『しがらみ』の正体分かり、とても助かった。勉学によって自分自身が救済されるという体験は初めてだった」等の感想を学生から得ることができた（授業評価アンケート）。

- ・情報メディアジャーナルや学会誌に、卒業研究・社会調査実習の成果を論文として掲載している。例えば下記がある。

小澤朋美・小徳咲輝・山崎瑞紀（2022）. 自己評価への影響度の認知と心理的距離が共感的羞恥に及ぼす影響 情報メディアジャーナル（東京都市大学横浜キャンパス），23号 6-10.

<https://www.comm.tcu.ac.jp/cisj/23/index.html>

山崎瑞紀・有川菜里子・片野紗恵・加藤優花・小林加奈・鈴木詩織・滝りりか・中佑里子・成田真裕（2021）. 大学生におけるLINEスタンプの利用動機に関する研究－因子構造，及び利用行動との関連 社会情報学，10巻1号，34-46.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ssi/10/1/10_34/_article/-char/ja/

5. 目標

短期目標

- ・各講義や実習を更に充実したものにする。
- ・学会発表や学会誌掲載といった新たな（成功）体験ができるよう支援し、学びの場を広げることに
より、学生の知的好奇心を刺激するとともに、目に見える形で成果を出すことで動機づけを高める。

長期目標

- ・研究室で大きなプロジェクトを学生とともに起ち上げ、進める。

【添付資料】

- ・授業評価アンケート：https://www.tcu.ac.jp/guidance/efforts/effort_6/
- ・シラバス：<https://www.tcu.ac.jp/academics/syllabus/>
- ・授業資料、開発教材
- ・授業動画
- ・社会調査実習成果報告書